

「第5回 中部 NGO-JICA 中部地域協議会」議事録

(以下、省略)

I. 開会あいさつ (NANGOC 山崎副理事長)

龍田： それでは皆さま、お忙しいところ、きょうどうも第5回中部の NGO-JICA 地域協議会にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

定刻になりましたので、始めさせていただきます。私は、きょう司会を担当します名古屋 NGO センターの理事をしております龍田と申します。よろしく申し上げます。司会は 2 人でやることになっています。

小原 JICA 中部の小原です。よろしく申し上げます。

龍田 それで、開会に先立ちまして、通例によりまして、まず NGO サイドから名古屋 NGO センターの副理事長の山崎のほうからあいさつをさせていただきます。お願いします。

山崎： こんにちは。本日は NANGOC 理事長の西井が都合で出席できなくなりまして、代理で話をさせていただきます。

アンケート調査とかいろいろな形で地元 NGO に直接聞き取りをして思いますことは、もちろん多数派の声とか全体の総意というのは大事です。

これから、時代の先を見据えたものを地域発信として見いだしていこうというときには、少数派だけれども、結構先を見ている声であるとか、本人はあまり気付いてないけれども、リアルニーズを掘り起こして、嗅ぎ取って、それを形にしていくというような作業が一步離れた者の役割であろうということをととても感じました。

それはまだ具体的な形としては出てこないけれども、見えないものを形にしていくというかなり難しい作業をしているという自覚を持って進めていければと思っています。

そしてもう 1 点が、とかく連携ということになりますと、型を用意して、そこに当てはめていくというパターンになりがちですけれども、NGO の特色として自主性に任せること。その自主性という中に、責任と自らの社会的な使命が試されるわけで、小さな NGO であっても、まだ生まれたて NGO であっても、その自覚というのは持っていないとなかなか NGO 活動というのは無理です。そうした自主性に任せることで底力は出てくるだろうと。任せながら、その底力を後方支援していくという関係が、どのような仕組みの中で生まれるかということも一つ課題として感じています。

それから、かねてより、中央集権といいますか、NGO の中でもやはり東京中心、大手中心があって、地方の小さな NGO の声というのがなかなか届いていないのをととても感じま

す。

届いてないというか、声を発してない。こうして聞き取りをしても声として出てこない
ので、伝えようがないような、不確かなことです。数からいけば、圧倒的多数の広い裾野
を形成している小さな地方の NGO 活動というのは市民の声を代弁しているという側面もあ
ります。そういった地方の小さな NGO に多様な機会を用意することは、とても大事です。
しかし中央にそのことが届いていないというのが現実です。こうした場で地方発のヒット
する活動を生み出していくということがまずは大事かと思えます。

今のところ、いろいろ手を打ってもなかなかヒットするものが編み出せておらず、もど
かしさを感じています。このアンケート調査からヒットするものが出てきたかといいます
と、まだまだそうではなく、見えないものを見据えて形にしていくというような作業、創
造的な作業を共にしていくという思いで、きょうの意見交換ができればと思っています。
どうぞよろしくお願い致します。

出席者の自己紹介

龍田： どうもありがとうございます。それでは、せっかくきょう皆さんいらっしゃる
ので、自己紹介をして、どんな方が参加されているかを皆さんに発表したいと思えます。

佐藤： こんばんわ。私は JICA 中部センターの市民参加協力課調整員の佐藤と申します。よ
ろしくお願い致します。

鈴木： JICA 中部で所長しております鈴木と申します。よろしくお願い致します。

今回で私は 3 回目でございますけれども、きょうはたまたま JICA の週に 1 回の T シャツ
クールビズデイにあたっていますので、広報を中心にとということで、みんなで T シャツを
なるべく着ようということになっています。

火曜日には民族衣装クールビズというのをやっておりますので、もし火曜日にお越しに
なると、ほとんどの人がみんな民族衣装を着ているということになります。よろしくお願い
致します。

八重樫： JICA 中部の八重樫です。よろしくお願い致します。次長と市民課の課長を兼務
しております。ちょうど見ていただくと展示を変えたばかりで、非常ににぎやかな、子ど
もたちを中心にした展示になっていますので、またお帰りのときでも時間があればちらっ
と見ていただければと思います。よろしくお願い致します。

立場： JICA 中部の立場と申します。私は昨年 10 月末から、以前、森川が担当してお
りました民間連携アドバイザーという業務を今度担当することになりました。初めてお目に

掛かりますけれども、今後とも引き続きよろしくお願い致します。

森本： JICA 中部の森本でございます。今、総務課のほうでおります。今日はよろしくお願い致します。

岩瀬： JICA 中部で研修事業を担当しております岩瀬と申します。4月に前任の渋谷の後任として着任致しました。どうぞよろしくお願い致します。

木村： こんにちは。JICA 中部市民参加協力課の木村と申します。1月に、以前草の根とか担当しておりました職員増井の後任として1月に着任しました。現在は、主に開発教育と広報を担当しております。どうぞよろしくお願い致します。

三輪田： こんにちは。JICA 中部市民参加協力課で民間連携事業を立場と共に担当しております専門嘱託の三輪田です。昨年度に引き続き、2回目の参加ということになります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

江口： 皆さん、こんにちは。江口と申します。私も佐藤と同じく市民参加協力調整員として、草の根技術協力事業を主に担当しております。どうぞよろしくお願い致します。

畑山： こんにちは、市民参加協力調整員の畑山です。草の根技術協力とあと開発教育のほうでは出前講座等も担当しております。JICA 中部では、森本課長に次いで、2番目に徐々に古くなってきたんですけども、引き続きよろしくお願い致します。

門田： 名古屋 NGO センターの事務局門田です。私も古くなるんですけども、今年で職員になって10年になりました。他に NGO センター4人職員おります。よろしくお願い致します。

藤井： NPO 法人 RASA-Japan の理事の藤井と申します。2002年から現地に建設活動に参加したのがきっかけで、それからずっと RASA に関わって、2004年6月から事務局をずっと担当して、自宅を事務所にして、ずっとフィリピンが対象なんですけど、ずっと活動を学校建設を中心にやっております。よろしくお願い致します。

杉山： 同じく RASA-Japan 理事の杉山と申します。私は RASA-Japan に関わって、まだ理事になって1年にならないのですが、RASA に4本柱がありまして、学校建設、親の就業支援、奨学金支給、あと給食という活動がありまして、今のところ全て寄付でまかなっております。

今回、こういう会議に参加させていただくのは 2 回目なのですが、今まで全て寄付でまかなってきたところを、JICA さんから何か出てくるのかなあ（笑）と思って、参加させていただいております。よろしくお願い致します。

伊藤： 私、名古屋 NGO センターの副理事長をしております伊藤と申します。あと、ニカラグアの会の事務局長をやっております、ちょっと今後、ACF、ネパールを支援している団体があるのですが、ちょっとそことも関係する予定です。どうぞよろしくお願い致します。

松田： 皆さん、こんにちは。名古屋 NGO センターでインターンしております松田と申します。インターンは 2 月から始めさせていただいております、きょうこのようなインターンの立場としてこのような貴重な機会に参加できたことをすごくうれしく思っておりますし、たくさん勉強させていただきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

中島： 名古屋 NGO センターで特に政策提言委員とそれから NGO のスタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ、ちょうどできたてほやほやのパンフレットがありますけれども、という 8 カ月のコースを毎年やっております。そちらの「N たま」の担当で、ちょうど、この表紙の写真には、フェアビーンズの北奥さん、店長が写っていますけれども、これで 12 期となります。たくさんコミュニティバンク momo を始めた方ですとか、いろんな方を社会に輩出しております、その担当もしております。所属はアジア保健研修所です。よろしくお願い致します。

龍田： すいません。僕もちょっと自己紹介させていただきます。龍田成人といいます。名古屋 NGO センターでは、大昔に事務局長代行をやって、ずっと理事をしているのですが、最初 NGO に関わったのは、ICAN の団体で、94 年に ICAN を作って、2007 年ぐらいまで代表をしていました。それで 2000 年前後に多分 NGO センターの理事になって、それからずっと理事をしています。

あと今は、アジア保健研修所の理事もしています。名古屋 NGO センターでは、一応今は主に、政策提言委員会のまだ委員長らしいのですが、去年ちょっと病気をしまして、それでいろいろできなくなったことがあるのですが、今年は JICA 中部さんとの地域協議会とそれから NGO-JICA 協議会の今年はコーディネーターもまたやることになりましたので、主に JICA さん担当と言うと変ですけど、そういう形です。

皆さん、いらっしゃる方はかなりもう知り合いの方もいらっしゃいますし、次長さんは前、地球広場のほうでお会いしたこともあります、三輪田さんは懐かしいんですけど、この共同のハンドブックを作っていくときに、ワークショップをしたときに、三重県の推

進委員としていらっしゃって、あのときはほとんどの推進委員の方が、若干なんかアンケート参加っていうのもありましたけども、あと調整員の方も含めて、皆さん来ていたで、NGO からもかなり出て来て、それで協働について話し合った経緯があります。

それからいろいろな経緯をへて、こういった協議会の場もできて、具体的に枠組みはほとんどできてきたというふうな経緯がありまして、前回、前々回ぐらいからそろそろどうももっと良くしていくのかみたいな、具体的な成果を目指した活動になっているというふうに自分では思っています。よろしくお願いします。

小原： すいません。私も自己紹介をさせていただきます。JICA 中部で、ここでの市民参加協力調整員の 3 名の女性と一緒に草の根技術協力事業とそれから NGO 連携を担当しています小原と申します。

恐らく、ここに来てから 1 年たって、最初は事情が全然分からないまま過ぎていったんですけども、前回 3 月に NGO の方々と直接お話をする機会をここで設けさせていただいて、そのアンケートの結果もそのときにお聞きをして、何となく事情が分かってく始めたという状況です。

龍田さんおっしゃったように、枠組みはできて、何か具体的なものをざっくばらんな形で、恐らく形式にあんまりとらわれるとできるものもできなくなってしまうというのも一方であると思いますので、そこは実利を取るような形でいろんな議論ができていけたらいいんじゃないかなあというふうに思っています。よろしくお願いします。

II. 報告事項

龍田： それでは報告事項ですが、最初の 30 分、私が時間頂きまして、主にアンケートについてご報告致します。

その後、15 分ぐらいで、小原さんのほうからその引き続き行った 3 月 16 日の意見交換会についてご報告いただくことになっております。

それではまず、最初に少し全体の流れをおさらいさせていただいて、なぜアンケートをし、意見交換会をしているのかという経緯を説明するために、中部地域の NGO に必要な支援策の提案に向けた協働のプロセスについて、という別紙をご覧ください。

地域の加盟団体、大きい所も小さい所もバラエティーありますが、なかなか協議の場とか、自分の意見を素直に言える所もたくさんはありません。そうした所からいかに意見を吸い上げて、全体の NGO と JICA の場に持っていくのかということ、山崎も申しておりましたように、声にならない声をいかにくみ上げていくというのが地域では必要なことになってまいります。

そうした背景から皆さんにもご協力いただいて、協働のハンドブックを作り、こういう場も設定しというのがこれまでの経緯で、前回、前々回におきましては、若干意見交換会

を NGO サイドで行い、それをもとに報告させていただいております。

以前、JICA の小原さんから「規模の小さい NGO 事務所の率直に意見をお聞きしたい」と、という話ができました。

そして、本日ご出席の RASA の藤井さんとか、ニカラグアの会の伊藤さんとかは、出席いただけただけけれど、本日出席されていない NGO の方々の声というのはやはり伝えられないので、私どものほうで、始めの取組として、NANGOC の全 50 加盟団体に声を掛けました。アンケートを送付しただけではなかなか返答がないため、直接面談した団体もありました。

アンケートの内容は、草の根のスキームから JICA 基金、それから N 連も含めて、各団体の活動を聴取しました。加えて、3 月 16 日のワークショップにおいて、市民関係の方にも参加をしていただき、その場でも意見が出されました。

次に、具体的にアンケートの結果についてご報告致します。

アンケートですけど、先ほど申し上げたみたいに、ほとんど聞き取り調査が主です。

内容としましては、名古屋 NGO センターの政策提言委員会に属している山崎、西井、龍田、中島、門田ですが、取りあえず担当を決めて、大体 1 人 10 団体ぐらい、取りあえず会っていただけますか、あるいは話を聞かせていただきますか、あるいは電話でどうですか、と回答方法を調査し、25 団体から実際に会い、あるいは電話で聞き取り調査を行っております。

結局アンケート及び面談、ワークショップ参加などで聴取できた団体というのは 33 団体です。

これは、多分かなり多いほうだと思います。なかなかそれだけの集約した NGO からの声を聞くことは、JICA 側が頑張ってもなかなか難しいし、今まで私どもでもかなり難しかったです。

質問内容については、9 項目ありますが、団体の活動内容運営について、助成金をどうやって活用しているか、JICA と外務省関連の助成について及び在外公館等の連携についてもお聞きしています。また、開発教育について、多文化共生、NGO 向けの研修、どのようなスキームを求めているかということも含めてお聞きしてあります。

お聞きした財政規模というのは、1 億円以上の財政規模の団体が 3 団体、5000 万円以上が 3 団体、100 万円以上の団体及び未回答の団体も含めていうと、非常にバラエティーに富んでいます。

事務所も専用で持っている団体は 19 団体ありますけども、自宅を活動拠点にしていらっしゃる方もいます。

それからスタッフについても、有給専従がいるという団体は、地域の特徴としてはそれほど多くありません。国内外を含めまして、全体の 30 パーセントぐらいです。

聞き取り調査では、団体によって、助成金及び公募スキームのさまざまな使い方があり、積極的に受託することによって、自分たちの団体を拡大、組織向上しようという団体も

あります。

活用実績としては、ボランティア貯金もありますし、JICA 基金、それから草の根もあります。

団体が申請するにあたり、一番負担に思っているというのは、申請書と報告書の作成及び会計という回答が結構多かったです。

JICA のスキームに関して、草の根（草の根技術協力）はよく知られています。JICA 基金は知っている団体は実施している。それから、N 連はあまり認知が高くない。これは結構特徴的なので分かってきます。

例えば、草の根技協に関しては、認知度は高いが、活用に関し、将来申請したい、と考えている団体とあきらめている団体もありました。それに比べると、JICA 基金は、認知度も高く、活用団体も 6 団体で比較的多いことがわかりました。JICA 基金ぐらいの助成資金と報告作業の軽減は使いやすいのではないかと、思います。

N 連に関しては、認知度が低いことがわかりました。また、青年海外協力隊との接点や、在外事務所から現地においてアドバイスがほしい、と、思っている団体もありました。

中部地域の特性としては、草の根技協は 2 から 3 団体が継続して受託しており、また、N 連のほうが活用しやすい、という理由で草の根ではなく N 連で実施しているところもあります。しかし、東京では、2 ケタ以上の団体が継続して受託及び活用実績があります。

関西は、名古屋よりも少し多い。ところが、名古屋以外の地域というのは、今度はほとんどなくなってきます。もちろん、例えば AMDA の MINDS とか中四国で 1 から 2 団体あるだけで、草の根技協のほとんど活用は進んでいません。

財政規模も中部地区では、比較的 200 万円から 500 万円の規模の団体はありますが、他の地域になると 1 から 2 団体は 1000 万円を超える団体はありますが、そのほかはほとんどみあたりません。

東京では中部地域と状況に相違があるため、中部地区から比較的小さい団体に対する施策の提言ができれば、それは全国どこでも通用するのではないかと、思っています。

今回の調査では、助成金や受託金のことだけでなく、活動におけるアドバイスや相談に乗ってもらいたい、という要望もありました。

現地における大使館や JICA 在外事務所との接点がほしいと要望がありました。草の根技協を受託していないとなかなか在外事務所の担当職員に現地でアポイントが入れにくいこともあるので、JICA 中部センターから面談のアポをいれてもらえたらありがたい、とのことでした。

山崎： 聞き取り調査では、予算や規模が一番小さな団体を担当しました。

小さな団体の特色として、このアンケートの項目の多くが当てはまらない、ということ

です。それは、自分たちの活動が質問内容に合わない、質問項目にすら乗ってこない、全然関係ない世界で活動しているという感じでした。申請書を作成して助成金などを活用しようという発想がまずない。

地域にすごく根付いているといいますか、小学校や町内会などヒューマンネットワークをしっかりと持っていて、そのつながりで活動しています。結構地元では認知度があり、例えばある団体は、町内会や学校の校区でつながりがあって、地域の学校の授業や PTA 主催のお祭りに呼ばれて、民族衣装を着て自分たちの活動を伝える。また、動物園のゾウと海外の活動地とのつながりから動物園でイベントを開催する。そうした自分たちのネットワークを活用して、国際協力の面白さを広げていっているという感じが強いです。

1人の秀でた創立者が周りの人につながって、その人が居るから一緒にやるというように知り合った人がメンバーとして活動に加わる、ボランティアを中心とした1人 NGO 的な団体が多いと思います。

そうした団体は、現場の活動中心で報告書作成など苦手です。現場の活動についてはいくらかでも話をすることはできるので、活字に起こしてくれる人がいれば、どれだけ助かることかとおっしゃいます。そうした団体の声に応じて支援していければ、これまでの蓄積された実績を活かすことができると思います。

それから、NGO センターの加盟団体の特色として、いわゆる国際協力の分野には含まれていない、とは相違があると思いました。

例えば、現在では国内問題とされている「多文化共生」に関わる団体がいくつか加盟しています。

日本の中に居る人を現地とつないでるといって人が加盟団体に入っている。難民や外国人労働者が抱える問題の根底には彼らの故郷・途上国の貧困問題があり、「国際協力」の既存の枠組みは、時代にそぐわなくなっていることを認めながら少しずつその枠を広げていくようなことをしていけないと感じています。

多文化共生分野の人たちのニーズは何かというと、やっぱり言葉で、JICA の国際協力人材セミナーに出たり、アドバイザー派遣を受けたりするが、その場ではよいのだけれども、やっぱり追いついてないというか、フォローがあるとすごく助かるとおっしゃいます。その時は分かったような気にはなるのですが、でもやっぱり分かってないので、わかりやすく翻訳・説明してくれる人が居るとものすごく助かるというのも新たなニーズだと思います。

他にも似たような意見として受けた研修がしっかり血となり肉となりになっていく（スキームがあるとすごくいいという意見もありました。

それは何かというと、3月のワークショップのとき参加者の発言で、あ、そうかと思ったのですが、「いろいろ JICA の研修とか草の根支援とか受けても、JICA と自分たちの関係で終わっているの、自分たちが得たことを他の NGO に伝えるっていうことができる、経

験共有を通して話し、聞きながら、あ、そういうことだったのかと学習になって、自分たちのものになっていく。」そのときは報告会みたいな言い方でおっしゃっていたのですけれども、NGO 支援事業の学びをサポートして強めるなにかのスキームがアタッチされていると、縦割りだったものを横につないでいくことになり、その人たちの自主的な学びの場を用意すると、JICA が用意したプログラムがもっと包括的に生かされるっていうことが聞き取りの中で分かってきた。ちょっと長くなりましたけど、このぐらいで。

龍田： 山崎も申し上げましたけど、いろんなことを狙いとして聞いているので、僕はちょうど JICA 基金から草の根っていう担当でして、彼女の所は非常に小さいけどいい活動をしてる所っていうような感じです。もう少し大きい所とかそれも担当別なので、もし中島さんか門田さんのほうから補足することがあれば。

鈴木 質問よろしいでしょうか。非常に貴重なインタビューだったと思うのですが、また、アンケート調査だったと思うのですが、今特に小さな NGO さんっていうお話がออกมาして、われわれもちょっとよく分からないのが、実際に具体的にどんな活動を途上国でやっているのかっていう、イメージがちょっと湧かないものですから、もし2、3こんな活動していますっていうのがあれば、ご紹介いただければと思います。

門田： 山崎さんが担当された団体名を思い出して、どういう活動だったか思い浮かべると、職員は置いてないのだけれども、長年その現地と日本と行ったり来たりされている。例えば、「国際相互理解を考える会」という会ですと、ネパールのほうで女性の職業訓練をやりながら、その女性たちが作った商品を日本に持ってきて、自分でフェアトレードショップを開いてらっしゃって、そちらで販売をされて、またその売上げを活動のほうに還元されていくというような活動をしている団体です。

山崎： それとか、その現地でレストランができるように。

門田： そうですね。そういった職業訓練、指導ですね。

山崎： 意識化とそのグループ化とそれから収入向上活動ですね。

龍田： 少し特徴的には、山崎も申し上げましたけども、そんなに事務局というか、日本人のスタッフの規模としては大きくなく、こじんまりとした集まりで、現地の活動の特徴としては、質は高いものもあるのですが、そんなに大々的には、例えば、相手先が一

つの作業所であったり、それから地域全体とか村全体とかそういう取り組みではなくて、ワンポットであったりとか、それからあと一つの小学校であったりとか。

山崎：最初は本当に小さな関係、一つの NGO と組んでやるとか、地域の女性グループでやったものが、だんだん地域全体、一つの村であるとか二つの村とかっていう広がりになっていくっていうこと、それから最初から事業体として始めている。現地でその相手が NGO だったりすると、結構だまされている。これ、だまされているなど怒ったり、やめたりしないで、承知でだまされながら、でも現地のあの子どもたちとかあの人たちのことを思えばやめられないと踏ん張って結構乗り越えるので、相手もだまさないで本気になってくる。ひと波越え、ふた波越えながら、底力を示して相手も変え、相手と一緒にあって現地を変えていくようないい関係づくりをしている話を聞きます。

それからある団体は、日本に外国人労働者として来日した人が、その活動地と同国であることから日本でつながりができて、現地が例えば幼稚園活動がうまく回っていないという話をすると、じゃあ、自分が帰ってそれをやりたいということになり、外国人労働者で来ている人が日本でその人と付き合うことによってその団体のスタッフになって、現地で職を得て、その団体を担っていくってような関係が生まれています。

龍田： 普通、そういうプロセス。

山崎：事業ベースでやっていると生まれにくいような人のつながりができています。

そういう団体は、PCM だとか PDM だとか、あとモニタリングだとかインパクト調査というのはなじまず、地道にやっていく中で確かなものを学び取っている。その底力を、NGO センターの仕事でもあるんでしょうけれども、なかなか伝えきれていない。

こういう団体を的確にとらえて、機会を提供していくと、もっとステップアップできるんじゃないかというのが見えてきます。

鈴木： ちょっとよろしいですか。どうもありがとうございます。

そうしますと、NGO さんという形は名乗ってはいないんですが、フェアトレード、今名古屋はフェアトレードタウンになろうっていうことで、皆さん頑張ってるかたがたたくさんいらっしゃるのですが、そういうかたがた、個々のかたがたっていうのは皆さん同じように途上国との関係を作って、ある村からものを仕入れたりして、それをうまく回るような仕組みづくりをしているっていう意味で言えば、そういうかたがたも皆さん、NGO ではあるんでしょうか？

山崎： そのなふたうんの会で中心的にやっている土井ゆきこさんは、GAIA の会として加盟団体に入っておられます。

彼女は、フェアトレードで商品を守るフェアトレードショップをやっているんだけど、開発教育と国際理解教育とフェアトレード商品、切り離せないってことで、結構いろんなワークショップをしている。特に問題提起型の開発教育ワークショップには定評がある。名指しで小学校の教師の方が呼んでくださる。でも現実を言えば小学校の教師はお金がないので、謝礼をもらっても2000円ぐらい、別にお金でやっているわけじゃないからいいのだけれども、その2000円がネックになって、その小学校教員の人はなかなか呼べないっていうギャップがあるって言うんです。

元協力隊員の方が行って話をされる。いろんな方がいらっしゃるので、それはそれでいいんですけども、もっと問題提起型で自分はやりたいと。単に外国こうだったよとかっていうのではなく、自分が生きるっていうことは、世界のあちらでは食べられない人も居て、今共時的に生きてるんだってことを一緒に考えながら、フェアトレードやオーガニックというキーワードで多彩にオルタナまちづくりにつなぐことをしています。特に名古屋でのフェアトレードタウンは地域再生をキーワードにしていて、シャッター通りとか商店街はなかなかふるわない現実に地域再生していくことと、フェアトレードとは密接なつながりがあるっていうことを発信しています。

その地域再生、そのまちづくりっていうのと国際協力ってつながらないので、やっぱりこれ縦割りになっていて、なかなか彼女がやりたいってことが載ってこない。そういう現場に居れば居るほど包括的なのですけれども、どうしても私どもの国際協力という縦割りで事業化してやっていくっていうところに載ってこない。どちらが時代を突いているかと言うと、やはり包括的なほう突いているわけで、こちらの縦割りの限界を彼女たちは切り開く力があるのだけれども、残念ながらこちらの限界でその可能性を開けていない。できるならばこちらが先を見越した活動として、そういう地域再生と結び付いた国際協力というところで、どうやってもっと広げていけるか、多文化共生でどう開いていけるかが課題だと思います。

学校教育は、今かなり問題になっている。学級崩壊ってありますよね。なかなか小学校で学級が成り立たない。それは何かっていうと、子どもが今孤立して、集団生活に慣れてないので、学校に来た子どもがクラスを作れない。それはもとを正せば、地域だとか人のつながりにつながっていく。長期的な話として、あるいはこれら含めた国際協力っていう見方でやっていかないとなかなかない。

彼女は何を言ったかっていうと、小学校の教師が国際協力で自由にとってこられるなんらかのスキームがあると、小学校の教師がそこにアンテナ張って、こういう人を来てほしいっていうふう言えると、もっと自由に動けるって言うのです。

私はその外務省の定期協議の担当もしているので、外務省に言うと、「いや、それは地域の JICA がやっていますから。」の一言で済んでしまう。だけど、形はあっても、現場はそこでプツンしているのです。小学校の教師が自由にとってこれる何かがあるってことは、

現場の声からするとすごく大事って言うのですね。だから、そこをどうつなぐかみたいな話になってくる。

龍田： すいません、いろいろ発散しているのですが、すごく多様な今つながりになっていて、先ほどフェアトレードショップは NGO かっていうふうにおっしゃられたんですけども、要は、フェアトレードって何かって言うと、僕の感覚からすると、何に資するか、何のためにやっているかで、その単純に利益のためにやっているか、あるいは、最終的な裨益者は誰かっていうところですよ。

例えば、お母さんたち、女性グループの支援のためにものを生産し、その生産して買い付けていたり、生産をやっているのが、お母さんたちそのものがやっている場合もあれば、今度はローカルな NGO がそれをやっている場合もあり、そこが他の企業と提携しつつ売っていたりとか、でもそれを今度日本で仕入れてきて、大きな意味でのマーケティングに協力していたりですね。

ただ、ある意味で、フェアトレードっていうのは、何でも買い付けるわけではなく、利益を優先するわけではなく、その開発課題に資するような方法で、そういった販売活動をしましようっていうような活動なので、NGO 的っていうえば NGO 的、社会派開発的っていうえば開発的な団体だと思うのですが、それが結構日本の NGO が向こうで作っている場合もあれば、向こうの NGO が作ってる場合もあれば、すごく今多様的になってきている。そこに今度、企業がどう絡むかでも、すごくかなり違ってきます。

その活動でやっぱり一番重要視されるのは、その NGO の場合ですと、特に一番困っている人たちがどれだけオーナーシップを持っていて、どれだけその生活を改善できたかとか、そういったものをちゃんと見ないと、意外とローカルの NGO のためにこき使っていたりとかするものですから、そういったものを見つつ、ちゃんと正しい目で見えていく必要があるというふうに思います。

ただ JICA と共通なところは、そういった社会課題の解決のために何らかの活動をしていると。それが意外と地域の場合、1人でやっている人たちも居て、それが割と何というか、組織立っていないのだけでも、その人が居ないと、例えばこのとてもローカルな所でいくと、あんまり国際協力との接点が全然切れてしまう、その村自体が。この人が居てくれるおかげで、三重はどうなのか分かりませんが、愛知の田舎とかそういう所では、この人が居るから取りあえず、あ、国際協力って重要なんだって思ってくれる人たちが居るといことで、確かに組織的にはどうかとかいろいろ、いろんな課題もあるのですが、ただその人が居るおかげで日本の人たちも関心を持ってくれ、海外の中でもいろんなつながりができてきて、手法にどうかっていうのはいろいろあるかもしれませんが、まだかなりいい人脈ができて仕事をしていると。それを何とかしたいっていうのが、一つのターゲットです。それは結構全国どこでも共通しているところですよ。なかなかそういった所

があるっていうことですね。

山崎：付け加えますと、ソーシャルプレミアムという費用が、フェアトレード製品価格に付いていて少し高い。それはオーガニックであるっていうことだけでなく、その現地の地域づくりだとか自立に向けた動きのために使うお金が例えば 30 パーセントなりの割増しで価格に付いているので、それを買うってことは、言葉を変えれば、寄付金が付いているみたいな、買うってことが自動的にその地域の自主的な自立に向けた動きへの参画につながる。

土井さんたちが何を期待するかっていうと、現地から人を呼べるお金がなく、補助されればすごくうれしいって言うのですね。というのは、自分たちが開発教育をしても自分たちレベルでしかできないんだけど、直接自分たちが支えようとしている現地の人を呼んでられるとなるともっとインパクトがあるし、現地の人たちへの力づけにもなるので、呼べるといいねという言葉がパッと返ってきたんですね。

龍田： そんな活動いろいろあるということ。

中島： すいません。せっかく小さい NGO の代表のニカラグアの会の理事が来ていますので、もっとそのフェアトレードと違う、現地に国際協力で貢献している NGO で、事務所ありますか？ だけど、フルタイムのスタッフが居なくて、駐在員も居なくて、どういふ国際協力をされているかっていうイメージがちょっとつかみにくい。

龍田： すいません。ここ報告なので、後々議論のものは・・・。

小原： 報告をさっとやってしまって、次の協議事項の 40 分のところで来られている方に生の声を伝えていただくということ。

中島： そうですね。後で。

小原： ちょっと私のほうから。

龍田： すいません、だいぶ超過してしまいましたけど、次に。

小原： すいません、時間もあれですので、私のほうから 3 月にやったその意見交換会の内容を、もうペーパーお配りしてあるので、読んでいただければいいと思うんですけども、NGO のかたがたに直接お越しいただいて、直接声を聞かせていただいたと。

私の率直なその印象をちょっとここでご報告させていただくとすれば、山崎さんもちょっとおっしゃっていたのかな。やはりその小さな医療さんは個人のイニシアチブで活動をされてきている方が多いので、個人の方が例えばお年を取られて、アクティブに活動できなくなったその後をどうしようかっていうその後継者問題っていいですか、人的に要するに、活動を継続するための人的リソースの不足なりに悩まれているというのがものすごく大きな問題として皆さん抱えられているなという感じです。

それから、龍田さんからもお話のあったとおり、やっぱり東京と違うので、活動自体やっぱり大きく、いい活動をしているけど大きくできないというところで、JICA のスキーム自体が若干大き過ぎて、活用が限られているという現実があるので、これをどうするかという、草の根をどうするか、JICA のスキームをどう活用していただくかという課題があるような気がしました。

それと、JICA のその仕組みをどう活用していただくかという、これは草の根なり、JICA 事業を念頭に置いたその連携以外に、名古屋で国際協力活動をしている、それから地域のその国際理解にもものすごく身近な所で活動しておられるその団体が居ると、それが地域の国際協力への理解につながったりする部分があって、それは JICA の仕事のいうと、その市民の国際理解教育みたいな業務をしているので、むしろその草の根でなんか海外に積極的に支援をしましょうっていうよりも、その方たちと連携することによって、地域の国際理解を深める活動を一緒にできないかという切り口でのその協働の仕方もあるんじゃないかなという印象を持ちました。

いろいろ具体的なやり方については、まだまだ議論をする必要があると思いますし、今日も後でそういう意見交換をしていただければいいんだと思いますけど、私自身がその草の根を前提にいろいろ物事を考えていたのですけども、他の切り口での NGO さんとの連携というのを少し、そっちのほうも模索していく余地があるんじゃないかなというのを 3 月の意見交換のときには感じました。以上です。

龍田： あと、中島さんのほうでちょっと補足とか、あるいは伊藤さんのほうであつたら。

中島：小原さんと重なるんですけれども、そちらの記録のイの所にもありますように、1 人 NGO が多い、結構あるということが分かりまして、高齢化に伴うカリスマを持った 1 人のリーダーの方が次のセカンドライナーの人たちをどう作ってくかっていうことが非常にこの地域でも課題であって、組織強化、人材育成に、非常に興味を持っていて、関心が高いですし、若い人たちのエネルギーを入れてくという意味でも青年海外協力隊との連携についても何らかの形で組織の中にそういう若い力を取り込みたいという切実な感じを受けましたし、早速そこで小原さんのほうから JICA ナイトですか？ 何でしたっけ？

鈴木： JICA 中部のタベですね。

小原： タベですね。

中島： タベを紹介していただいたら、次の機会に NGO さんがそこで参加されて。

小原： そうですね。

中島： いろんな横のつながりを持てたということで、積極的にもうすでに始められている所もあったと聞いております。そういう印象を持っております。いいですかね。

龍田： 他はどうですか？ 他の方とか補足あれば。RASA の会の方とかどうですか？ よろしいですか？

藤田： よろしいですか？ 先ほど海外の NGO と提携している場合に、そのいろんな補正というか、要するにこれは商社の方が長年、外国とのそのやり取りの中で、本当に苦勞して得られた体験っていう中から伺った話なのですが、やっぱり NGO といえば、人々のために役に立つという、われわれは現地の NGO そういうふうにとらえているんですけども、結局のところ、やっぱり特にアジアの途上国の国々、たくさんの国経験された彼の話は本当に私どもに身に染みて分かったことなんですけど、やっぱり何ていうか、日本と交渉する間に、やっぱりおいしいところっていう、つまんでいくっていうか、そういうところはやっぱりあって、日本の NPO が理想的に本当に純粋に現地を支援したいという思いと大きなズレがあるっていうことを私たちが向こうの NGO と関わって行って、本当に 10 年以上関わっている中で体験したことで、これからその NGO ともう手を切って、こちらと向こうとで別の日本人スタッフが置けるような経済状況ではないんだけど、何とかもっと有効なお金の使い方ができないかとか、それから現地のそういったことを本当に皆つくづく感じてる次第です。

<5 分間休憩>

Ⅲ. 協議事項

小原： 再開したいと思います。それでは、第 1 部でいろいろこれまでの取り組みなり、状況報告をさせていただいたんですけども、ここからは自由な意見交換になります。

皮切りに、今日いらしていただいているニカラグアの会の伊藤さんに、もう率直なまずご意見なり、感想なり、今考えていることとかをちょっとだけお話しただいて口火を切っていただければと思います。

伊藤： 分かりました。私、先ほども自己紹介致しましたけども、ニカラグアの会の事務局を何年ぐらいですかね、5、6 年やっております伊藤と申します。ニカラグアの会は、年数としては 1985 年に学生のころが立ち上げまして、今年は 2014 年ですからそろそろ 30 年という団体ですけども、ほそぼそとやっております、なんです。

ニカラグアは、私が最初関わり始めたころは、日本でも新聞とかでもいろいろ記事が載りまして、全国的にもいろんなニカラグアに支援する団体、が何団体かありまして、全国で集まってというのがあったのですけれども、今ほとんどそういうのがなくなりまして、多分、今日本から支援っていうか、入っている団体は二つ、三つぐらいです。

私たちはずっと、もともと途中から入ったパターンなのですけれども、キリスト者、神父さんがすごく勢力的に広げられたものですので、神父さん関係のカウンターパートと共にやっております、今二つのカウンターパートと共にやっております。

特に教育分野なんですけれども、最初は子どもの奨学金支援とかやっておったのですけれども、その辺プラス、先生の給料保全とか学校修繕とかやっております、それに加えて、今いろんな国そうだと思うんですけど、電気というものがやっぱりちょっと不足していると。それを輸入したもので、化石燃料でやるっていうのはどうかなっていうこともありますので、再生可能になる、特に太陽光というものを使って、環境教育、環境保全まで含めて活動をやればなと思って、向こうのカウンターパート、何ていうんですか、向こうのカウンターパートの力量に合わせてやっていくというか、こちらからどんどん事業拡大という形ではなくて、向こうのペースに合わせていって、うちの団体だけがお金出してるわけではありませぬので、そういう形で向こうのペースを見ながら、こちらも動いていくという形で 30 年近くやっております。

ですので、何ていうのでしょうかね、うちの団体はここにも前のときにもお話ししたんですけれども、JICA 基金頂いたこともありますし、他の助成金も頂いてることがあって、やっておるんですけど、なんかちょっとこういうときにお金が要るといときに、助成金申請してやっております。

ですので、一番その助成金とかそういうものを考えますと、そういうときではありますけど、複数年で、JICA 基金ですと 3 年ですので、複数年でやれる、金額があまり上ではなくて、向こうのペースに合わせてますので、力量っていうものを考えると、それほど高くな

い額で長いことやりたいなというか、一つの事業の中の3年、4年とかそういう感じ、2、3、4年ですかね、できればなと思っております。

そういう意味で、なんかいろいろ、JICAさんからもそういう新しいとは言わないんですけど、小中団体向けのサポートというか、先ほども言われましたけれども、いろんな意味の少しできない部分っていうのが多分結構あると思うんですよね。そこも加味していただいて、その部分は少し目をつぶっていただくような形の制度っていうものがあると非常にいいかなと、そういうふうに思っております。このぐらいです。

小原：ありがとうございます。RASA-Japanさん何かございますか？

杉山：先ほど RASA-Japan、4本柱で活動しておるといふふうに申しあげましたけれども、お話伺っているうちに、RASA-Japan がやっております学校建設というのは、現地で校舎の足りない所に寄付で集めたお金で校舎を建てているわけなのですけれども、その建てるに当たりまして、日本から建設作業員を募集して18日間現地に派遣しています。

その建設作業員はほとんど大学生の方です。18日間、1人1家庭でホームステイをしまして、現地の人と寝食を共にして、現地の方の子どもさんたちのための小学校を作っているわけですね。

去年が52名で、その前の年は57名でしたか。そういった規模の学生さんたち、事前に3回の研修は行方なのですが、行ってからと現地で作業して、軽作業なのですが、コンクリートづくりの砂をふるったり、ペンキ塗りやブロックを運んだり、なぜか参加者も女性のほうが多いです。女子学生の方が圧倒的に参加して下さるのですが、そういった軽作業で、でもフィリピンですので暑い中、皆さん建築現場の作業をして、現地の文化に触れて、現地の食事をして、それでもうたくさん愛されて、すっかり人生感が変わって、戻ってくるということをしています。

この、私どもがやっている給食事業とか親の就業支援とかいうのは、何となく今までそういう支援を JICA さんとか外務省の何でしたか、N 連ですか、申請しようというふうには考えてなかったのですが、もしかしたら、毎年50人前後の学生さんたちにこれだけの国際理解と自己啓発とかそういうことをしてるわけなんです。そういったことに使える資金っていうのはないものかなというふうに思いました。

小原：どうもありがとうございます。ちょっと今お話のあったそういう活動に使える資金なり、お金がないかというご質問かなと思ったのですが、中身をもう少し詰めて、どういうことかっていうのをクリアにする必要が実はあるのですが、同じような、この前、草の根10年の振り返りの中で、京都の光の音符という団体さんが、これは学校の先生、大学の先生がインドの孤児院のあれですかね？ そういう孤児かなんかの子どもたちに音

楽を教えるみたいな情操教育みたいなところから離れているので、そういう子たちに音楽、情操教育をしましょうということで、その学生さんを募って、それでインドのそういう子どもたちに対する情操教育みたいなやつを始めたという活動があって、それが草の根の支援型を取って活動をしていたという例がありましたね。

ですから、それはなぜいい例というか、こういう例もありますよというので紹介されたかということ、その学生さんたちが自発的にどんどんその光の音符というその団体の活動に参加して、ものすごくその活動を担う学生が自己増殖的に増えていって、広がりを持つようになった好例として、実は紹介されていました。

ですから、もしかしたらそういう例がありますので、草の根のその支援型に工夫すれば、応募できるかなという、ちょっとそういう似た活動はあるなというふうに今思いました。

龍田： なんかボランティア貯金だとそういう活動を意図して、結構それで交渉に当たっている例がいっぱいあるのですが、草の根の場合だと多分、事業設計をちょっと考えて工夫する必要があると思うのです。だから草の根でメインのそのゴールが日本の学生の啓蒙ってところだと通らないので、そこも副次的な効果としてあり、どう向こうに技術支援としての効果をもたらすか、それであると、プラス向こうはそのままこれ終わっても向こうはちゃんと運営できる、みたいなのが見えるような事業設計、活動、それが嫌であれば、自分たちの団体としてそぐわないっていうのであれば、応募する必要はありませんし、自分たちの団体としてそういうものを目指したいっていうものに近いものであれば、少し事業設計を変えて対応することもできるかもしれません。

多分、その光の音符さんの例は少し工夫した例だと思いますし、今までの例を見ると、いくつか似たような例はあると思いますので、工夫次第かと思います。

小原： 今、恐らく JICA のその制度、ニカラグアの会さんは JICA 基金を使われた経験があると、それから JICA の草の根の可能性みたいなことだったと思うんですけど、もう少し小さな、使いやすい仕組みがあるといいなというのは、恐らく名古屋地区、中部地区のその NGO さんの、何だろう、最大公約数的なご意見なのかなという印象を持っています。

ちょっとだけ、私が先ほど申し上げた、なんですかね、NGO の活動を担う方たちの、先ほど「Nたま」の話もありましたけど、その点に関して、何か NGO さん側からこういう取り組みは試してみる可能性があるとかいうようなアイデアみたいなやつからございますかね？

龍田： NGO センター事務局のほうでも、アンケートやりっぱなしではなくて、少しどんなことが考えられるのかも担い手の部分も含めて、いろいろ検討したと聞いていますので、少しその辺、門田のほうからご説明させていただきます。

門田： ご報告ありがとうございます。先ほどもおっしゃってたその後継者不足、全体的に担い手の方々が高齢になってきていて、どういうふうに世代交代が課題になっていることが印象に残られたというお話が出ていましたが、私ども名古屋 NGO センターの事務局でアンケートと意見交換会を受けて、ちょっとプレスト的に出したものでいくつかあります。一つは組織の基盤の強化というところと人材育成、高齢化課題の対応というところなのですが、高齢化課題の対応については、「Nたま」のチラシお配りしたのですが、パッと見ていただいて、若い世代対象のものかなという印象を受けられると思います。

若い世代の育成というところで、「Nたま」研修を通してこれまで10年以上やってきましたが、中高年の方々がやってらっしゃる団体に若い人を送り込んでも、スムーズに世代交代というところまではいかないというところがこれまでやってきた経験でございます。やはり、長年やってこられた方は、その団体への思いだとかやり方に対するこだわりみたいなところがあるので、それを若い世代の方にもそのまま受け継いでというのはなかなか難しく、世代交代がうまく行かないというのも地域の課題じゃないかなというふうに思います。

であれば、例えばシニア層から少し若いシニア層へのスライドがあるのではと思います。私どもはスタディーツアーの合同説明会をやっていますが、今年はそういった方々にも来ていただきたいなと思って、広報をしました。例えばそういった会社を退職されてすぐくらいの方がスタディーツアーに参加し、その後、その団体のボランティアを始めて、運営の側にも入っていかれてというような形で、少しずつ5歳、10歳ぐらいの世代交代になるんですけれども、そういった事例を持っている団体もありまして、同じ世代の方々同士で団体の継続的な運営を少しずつスライドさせていくようなものができればという案もありました。

JICAのシニアボランティアの説明会のほうに過去何年か、私どももNGO相談員として出展しています。やっぱりかなり長年の専門的なスキルだとか専門技術がもう求められるというところで、なかなか自分に当てはまる専門スキルがシニアボランティアの中で見いだせなかったというような例をお伺いしました。例えば小学校の先生をやってらっしゃった方で、2年後に退職を考えているが、日本語教師といってもそれほど経験もない、海外で何かしたという経験もないので、どうしたらいいでしょうと相談がありました。であれば、NGOを始めるに何か資格や条件が必要ではないので、ぜひスタディーツアーに参加してくださいとご案内をしたような相談ケースがありました。例えばそのような退職されてすぐくらいの方とかこれから退職考えてらっしゃる方向けのスタディーツアーと研修やインターンを組み合わせたNたまのシニアバージョンではないのですが、そういうようなものも考えられるんじゃないかなあというような話をアイデアとして一つ出しております。

あとは、これからNGOに関わりたい人ともうNGOの若手スタッフの間を埋めるようなもので、Nたまを卒業し開発教育などを受けて、刺激を受けてNGOでボランティアをしている

が、スタッフとしては技術や経験が足りないという方の中間層向けというか、そういった方を対象にしたような海外での研修を有効ではないかと言っております。

もう一つ高齢化と離れるんですけども、基盤強化というところで、他の助成金のプログラムにある事例で応用できたらという例があります。具体的に申し上げますと、パナソニックがやっている組織基盤強化の助成金。その助成金の説明会と同時に、団体向けの組織基盤強化の講座というのをやっており、説明会と講座が一体化したものなのだが、それは全国何カ所かで開催され、まずは助成金を活用する前に団体の中でそういう組織基盤の強化の重要性に関する研修をやります。実際に助成金も組織基盤強化に使える助成金。例えば、JICA 基金や草の根技術協力の説明会と同時に、そのビジョンづくり、団体としての戦略づくりの重要性っていうのをアピールする中で、その中で資金をどう活用していくか、説明会と一体型、例えばそのようなものも考えられるんじゃないかと案が出ました。

あとは、先ほどのニカラグアの会のお話とも重なるかもしれないですが、プロジェクトの事前調査、事後評価に使える資金がなかなかないので、それに使えるものというのはいくつかの団体から要望が高いのではないかというアイデアも出ております。アイデアベースのことで長く申し上げましたが、また今後の参考にしていただければと思います。

小原： じゃあ、山崎さん、どうぞ。

山崎： この地域、地方の小さな NGO が何とか頑張れるように、どんな助成があればいいのかメールで投げましたところ、若い人から全然違う角度から言ってきて、あ、本当に若い感覚だなと思ったのは、NGO をこれから立ち上げたい、起業したい若い人たちを育てることを念頭に置いた起業コンペなんですね。取りあえず企画を出してもらって、それにお金を付けて、プラス、経験のある人、そのアドバイザーみたいな人を 1 人付けると。基本的には、主体的に自由にやりたいことをするのだけれども、それに対して、それは客観的に見るとこういうことだよとかいろんなアドバイスもらいながら、ゆくゆくは起業、その NGO を立てていくと。

実際に若い人で NGO を興している人が居る。それはよっぽどいろんな環境が整っていて、その人自身もいろんな力を持っていてだけれども、そこまででない人も起業できるようにするためには、一つ冒険してみる、支えるほうが冒険してみるということがないとなかなかできない。この企画じゃ無理だねっていうことでポンと蹴らないで、冒険に乗ってくれるような企画コンペがあるといいという意見がありました。

小原： どうもありがとうございます。JICA 側は何かありますか？

八重樫： ありがとうございます。なかなか全てをこう解決する解答っていうのはないん

だと思いますけれども、さっき門田さんが言われたように、JICA のボランティアの説明会と一緒に参加していただいて、ボランティアには興味があるけれども、いきなり海外はやっぱ厳しいよとか、健康面で不安だというようなかたがたを、こういう選択肢もありますよというふうに対応していただくのは、一つの具体的な方法だと思います。

ただ、そうは言っても、全ての説明会に門田さんが一緒に出るわけにはいかないと思いますので、JICA 中部でやるようなときには、一緒に出ていただくとか、そういうことを続けるしかないのかなというのが一つと、それから小さなサイズでの対応っていうところだと、いろんな所でもう出ていると思いますけど、ミニ草の根みたいなものをやっぱちゃんと枠として作ってもらって、そこはもう大きなサイズの NGO のかたがたと競合しないように別枠として、それを作ってもらって、例えばさっきどこで言われたか分かりませんが、海外からどなたか呼びするようなことにもそれで対応できるのではないかなと思います。

今でも草の根の支援型は回数制限があつたりしますけれども、ミニ草の根にして、かつ回数制限をもうなくすというか、あまり厳しい制限を設けないような形でやれば、本当に地道にコツコツとやっていたら、ちょっとしたサポートがそれでできるのであれば、それも一つの選択肢、かつその JICA 基金と草の根の中間ぐらいの性格をそのミニ草の根にうまく乗っけられればいいと思います。そういったアイデアもぜひ外務省と NGO さんとの協議会の場なんかでもどどんぶつ付けていただき、そこはうまくその話を出すルートを活用していただければ、と思います。

あとは、後継者の所では、その JICA 中部の夕べもそうですけれども、今、年 2 回、帰国隊員の報告会をやっています、これは 7 月と 1 月だったですかね。次回は 7 月 26 日です。

八重樫： 26 日にあるのですが、一般の方々とか企業の方も参加されるようになっていて、企業の方もその場で、ぜひこの人わが社に欲しいっていうようなこともあつたりするので、同じような形で帰国隊員の報告を聞いていただいて、関心のある隊員の方には NGO のほうからもアプローチをしていただくのが一つの方法だと思います。

実際に隊員の方の生の報告を聞いていただけますので、半日でどれぐらいですかね。人数的に 60 名とか 70 名とか、4 部屋を同時に進めるのですが、どの部屋に行くかはもうそれぞれ好きなように選んでいただけますので、そういったところを活用していただくっていうのがあるんじゃないかと思いました。

小原： 他に JICA の方、じゃあ。

畑山： 市民参加協力調整員の畑山ですけども、先ほど門田さんのほうから、ごめんなさい、もしかしたら個人的にお話しすればいいかもしれないんですけど、「N たま」で終わ

られた方が、じゃあその次に NGO のほうでインターンシップ等で活躍をするというお話があったんですけども、そこでもう一つワンクッション入ってしまうんですが、実は坂井さんのほうから、「N たま」を受けられた方でもその後、NGO に進まずに協力隊に行かれる方も多いと伺っています。

先ほどお名前が少し挙がっていた DIFAR という三重県の団体さんなのでですけども、今、草の根技術協力のパートナー型もやっています。その現地のほうに、もちろん事務所があるんですけども、協力隊に行かれた方が任期を終わられて帰国されて、その後 NGO の活動に興味があるということで、1 年程度インターンをしていただくために、その帰国単位の支援制度として、そのインターンをする費用の負担と公費であるとか、そういうものを負担するという帰国単位向けのスキームがあるんですね。そういうものも N たまのときに少し広報していただければ、そこが少しつながるかなというところがあります。

この前の、その DIFAR さんの例でいくと、私、案件を担当しているほうからいけば、現地のその人手が足りない所をうまく現地を知っている方、ボリビアの隊員さんだったので、知っていただいて、協力いただいて、順調に流れたというところもあって、この前、報告会を少し聞いたんですけども、やはり現状をよく理解されての活動ができたということで、それなりの成果も出ていたかなと実感しております。以上です。

佐藤： すいません、人材育成の観点からなのですけども、ちょっと育成というところが違うんですけども、例えば学生さんの進路であったり、シニアの方々の今後のお仕事といいますか、NGO さんでという形については、今、なごや地球ひろばでは、ボランティア地球案内人さんということでメニュー置いていますけれども、そういったかたがたの活動って、大体月に 2 回ぐらい入れるようなペースでやっているんですね。もし、それ以上に活動なされたいとかそういったかたがたが居たら、こういった「N たま」もしかり、そういった NANGOC が主催するような育成事業ですとか、そういった所にご案内できるようなふうにはしたいな、と思いました。

それは多分、私たちだけで思ってもなかなか伝わらないものなので、広場に関係する人たちにもうちょっと伝えるなりして、いろいろと動かさせていけたらなあと思った次第です。

龍田： いろいろご意見ありがとうございました。NGO 側も JICA さん側もどうもありがとうございました。

いろいろ意見出ましたし、すぐできそうなこともあるかなとも思いますし、またちょっと工夫が要るような、あるいはコンサルテーションが要るようなものもありますので、最初に申しあげましたように、半年ぐらいをめどにもう少しぎっくばらんに、ちょっとこういう会議だとなかなか言えないこともありますし、いろんなことを整理して、基本的に総

別して簡単にできることはやり、ちょっとこういうことはもっと工夫が要るみたいところは、ちゃんとぶっちゃけた話をする場を設けまして、できれば今、コーディネーター会議のコーディネーターのメンバーと、それから今、門田のほうからありましたが、名古屋 NGO センターの事務局のサイドで少し考えてもらいますし、JICA の関係者の方からも入っていただいて、もう少しこのアンケート結果、それから意見交換会のご意見、それからきょうのご意見も含めまして、何ができるかというのを整理して、逆に言うと、それを整理した上で戦略を立てて、ちゃんと毎年、まさに PCM が回るように目標を立てたりしながら、少し改善できるようなサイクルを回すようにしていきたいと思っておりますので、その辺はいかがでしょうか？ それで皆さんご賛同いただければ、その方向で進めるという形にさせていただきたいんですけども、よろしいでしょうか？ その間に、いろいろ意見をまだ言っていたく機会はありますので、じゃあ、そういうことでさせていただきます。

IV. その他

小原： それじゃあ、ちょっと議論が足らなかつたかなあと思う気持ちもあるんですが、時間も来ましたので、その他ということで、まず中島さんのほうからですかね？

中島： こちらの資料の最後のページの所に、ミレニアム・ゴールってどうなったの？ というのがありますが、皆さん、きょう T シャツも着てらっしゃるので、釈迦に説法というか、前半の所は本当にご存じのとおりなのですけども、2005 年からこれはパリですか。援助効果を高めるための各国政府と援助機関の話し合いが進められまして、その中でも市民の声がなかなか反映できなかつたということがありまして、2008 年にアクラという所でその援助効果に関する閣僚級会合があったときに、広く市民社会の声を聞くプロセスを取るようになりました。

そこで市民社会組織 CSO が主体的に行う活動、自分たちが行う開発活動をやはり援助効果だけを批判しているんじゃなくて、CSO はどうなのか、NGO はどうなのかっていう自分を見つめ直すそういう動きっていうのが、70 カ国以上で 2000 を超える NGO が参加しまして、日本でも国内コンサルテーションというものが JANIC（国際協力 NGO センター）を中心に名古屋 NGO センターも参加しまして、話し合いが進められてきました。

2011 年、釜山の閣僚級会合の中で、CSO の意見、存在も認められて、援助効果っていう名前から開発効果、国際開発協力という考え方に変わってきたというのも、CSO と各国の話し合いの中で流れが変わってきたと思います。

世界のいろんな 2000 年以降の国際的な開発潮流について、分かりやすくお話を大橋正明さんから聞いてみようという会を名古屋 NGO センターで企画しました。

今までの話し合いは JICA から NGO に対してどういう支援策ができるかっていう話し合いをしてきたんですけど、これは NGO 側から対等なパートナーとして JICA さんのほうにこち

らの企画として、ぜひ参加してくださいということで提案をさせていただいております。

お時間が7月26日の午後ということで、夏休みの地球ひろばも大変忙しい時期ですので、重なるような形なのですが、もしJICA側の方でこの会も参加していただければ、その後大橋さんと一緒に飲む会も予定をして、NGO側の飲み会にも参加していただければと思っております。ぜひパートナーとしてNGOが考えていることを一緒に参加してほしいと思います。

ちなみに、下のシール、この八つ、イスタンブールの8原則とCSOの8原則をシンボルで表しておりますが、何を表しているか分かりますかとかいって。

2番目はジェンダーですね。これはすぐ分かります。最初のやつは、底辺に置かれた人たちの人権、それから3番目が民主的オーナーシップ、それから環境、それからアカウンタビリティ、対等なパートナーシップ、それから相互の学び合いで、最後の道を表しているのが持続的開発、そういうものをCSOの開発効果の大事な原則として、みんながCSO、NGOが目指していきましょうというNGOの振り返りのワークショップも後で持つ予定になっております。以上です。

八重樫： ちょうど先ほどの帰国隊報告会、まさにこの同じ日の同じ時間帯です。ちょっと・・・。

―― 厳しいですね。

小原： それじゃJICA側からも1点だけちょっとご案内をさせていただきます。

木村： すいません、お手元に1枚配らせていただいたのですが、6月1日にJICA中部も以前あった名東区の一社から、ささしまライブに移ってちょうど5年になります。その際に開設した名古屋地球ひろばも同時に5周年を迎えることになりまして、記念イベントをこの度開催することになっております。

6月1日の1日中になってしまうのですが、午前の部はお子さまがほとんどの主になるのですが、午後の部で分科会方式でJICAの様々なスキームに関する方々のレポートを企画しております。

NGOさんからはICANさんに草の根技術協力プロジェクトの活動報告を行っていただくので、もしよろしければご参加いただければと思います。

後でお配りしますが、その後5時半からJICA中部の夕べを開催しますので、合わせてご参加いただければと思います。以上です。

VI. 閉会あいさつ（JICA中部 鈴木所長）

小原： どうもありがとうございました。それでは最後に鈴木のほうから絞めのあいさつをお願いしたいと思います。

鈴木： きょうは長時間にわたり、ありがとうございました。今回は3回目ということで、やはり少しずつ進化している、といいますか、中身が進んできている、というふうなことも私なりにちょっと実感しております。

なぜかといえば、やはり今回はそのアンケート調査を参加団体さんになされたってということと同時に、実際にそこでどういうことがいろいろ皆さん悩まれているのかということも把握されたってことでございますし、あとはその JICA と NGO さんの意見交換会っていうものを実際にやりまして、このワークショップの中でやはり同じように共通する問題点というのも浮かび上がってきたのではないかと思います。

そこで私なりの印象なんですけれども、やはり東京中心型の割と大型の NGO さんと比較して、やはりその名古屋だけじゃないとは思うのですけれども、地方の NGO さんの場合には、必ずしも同じようなバックグラウンドではないのではないかなというところも何となく私なりに把握できてきました。

そういう観点でいいますと、最初に山崎さんのほうからもお話がありましたが、声なき声をやはりわれわれもしっかり吸い上げられるようにしませんかという、そういう問題提議があったと思うんですが、どこまでできるかは分かりませんが、先ほどちょうど私も言おうかなと思っていたことを八重樫のほうですでに言ってしまいましたが、ある程度、ミニ草の根と

いう新しいカテゴリー、地方の NGO さんにやっぱり一番フィットするサイズのスキームっていうものを、やはり地方からぜひそういうものをお願いしたいということをお願いしてくることが、まずは重要なんじゃないかなと思います。

もちろん、その JICA 基金の、よりフレキシブルな活用っていうものもあるのかもしれませんが、そういった地方の声をやっぱりアピールしてく必要があるっていうことは、私なりに理解したつもりであります。

それから、後継者の問題については、我々というよりは、NANGOC さんご自身の問題でもあるとは思いますが、先ほど本当に八重樫が言いましたように、われわれができる所での協力っていう意味では、まさにその帰国報告会に来ていただいて、NGO の仕事というのをご紹介いただくのがよいかなと思います。あるいは JICA 中部の夕べ、今ご紹介ありましたけれども、そういった所で、毎回 100 人以上の規模で、いろんな方、JICA の事業に関わるあらゆる方々も参加しており、また学生さんも来られたりもしますし、そういった方々と緊密なネットワークを作っていただきながら、将来の「Nたま」というんでしょうか、NGO の後継者を発見、もしくは発掘していただければなというふうに思います。私のほうからは以上でございます。きょうはどうもありがとうございました。

小原： それじゃあ、第 5 回の中部 NGO、JICA 中部地域協議会をこれで終わりたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。

(了)